TADOKU JUNIOR はじめての名作童話 ★★★☆☆ ふつう 779語

Chicken-Diddle

チキンディドル（空がおちてくる！）

Katharine Pyle（1918年の本） 原文そのまま 朗読：Jade Hjelstrom

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？ しっぽにバラの葉がおちてきて、「空がおちてくる！」とさわぎだしたチキンディドル。友だちの鳥たちもいっしょににげだしますが、さいごに着いたのは……。

One day Chicken-diddle had gone to sleep under a rose-bush, and a cow reached over the fence and bit off the top of the rose-bush. The noise wakened Chicken-diddle, and just as she woke a rose-leaf fell on her tail.

“Squawk! Squawk!” cried Chicken-diddle, “the sky’s falling down”; and away she ran as fast as her legs would carry her. She ran until she came to the barnyard, and there was Hen-pen rustling in the dust of the barnyard.

“Oh, Hen-pen, don’t rustle—run, run!” cried Chicken-diddle. “The sky’s falling down.”

The hen stopped rustling. “How do you know that Chicken-diddle?” asked Hen-pen.

“I saw it with my eyes, I heard it with my ears, and part of it fell on my tail. Oh, let us run, run, until we get some place.”

“Quawk! Quawk,” cried the hen, and she began to run, and Chicken-diddle ran after her.

They ran till they came to the duck-pond, and there was Duck-luck just going in for a swim.

“Oh, Duck-luck! Duck-luck! don’t try to swim,” cried Hen-pen. “The sky’s falling down.”

“How do you know that, Hen-pen?” asked Duck-luck.

“Chicken-diddle told me.”

“How do you know that, Chicken-diddle?”

“Why shouldn’t I know it? I saw it with my eyes, I heard it with my ears, and part of it fell on my tail. Oh, let us run, run until we get some place.”

“Yes, we had better run,” quacked Duck-luck, and away he waddled with Hen-pen, and Chicken-diddle after him.

They ran and ran till they came to a green meadow, and there was Goose-loose eating the green grass.

“Oh, Goose-loose, Goose-loose, don’t eat; run, run,” cried Duck-luck.

“Why should I run?” asked Goose-loose.

“Because the sky’s falling down.”

“How do you know that, Duck-luck?”

“Hen-pen told me.”

“How do you know that, Hen-pen?”

“Chicken-diddle told me.”

“How do you know that, Chicken-diddle?”

“Because I saw it with my eyes, and heard it with my ears, and part of it fell on my tail. Oh, let us run, run some place.”

“Yes, we’d better run,” cried Goose-loose.

Away they all ran, Goose-loose at the head of them, and they ran and ran until they came to the turkey-yard, and there was Turkey-lurkey strutting and gobbling.

“Oh, Turkey-lurkey! don’t strut! Don’t strut!” cried Goose-loose.

“Why should I not strut?” asked Turkey-lurkey.

“Because the sky’s falling down.”

“How do you know it is?”

“Duck-luck told me!”

“How do you know, Duck-luck?”

“Hen-pen told me!”

“How do you know, Hen-pen?”

“Chicken-diddle told me!”

“How do you know, Chicken-diddle?”

“I couldn’t help knowing! I saw it with my eyes, I heard it with my ears, and a part of it fell on my tail. Oh, let us run, run until we get some place.”

“Yes, we’d better run,” said Turkey-lurkey, so away they all ran, first Turkey-lurkey, and then Goose-loose, and then Duck-luck, and then Hen-pen, and then Chicken-diddle.

They ran and ran until they came to Fox-lox’s house, and there was Fox-lox lying in the doorway and yawning until his tongue curled up in his mouth. When he saw Turkey-lurkey and Goose-loose and Duck-luck and Hen-pen and Chicken-diddle he stopped yawning, and pricked up his ears, and he was very glad to see them.

“Well, well,” said he, “and what brings you all here?”

“Oh, Fox-lox, Fox-lox, don’t yawn,” cried Turkey-lurkey, “the sky’s falling down.”

“How do you know that, Turkey-lurkey?” asked the fox.

“Goose-loose told me.”

“How do you know that, Goose-loose?”

“Duck-luck told me.”

“How do you know that, Duck-luck?”

“Hen-pen told me.”

“How do you know that, Hen-pen?”

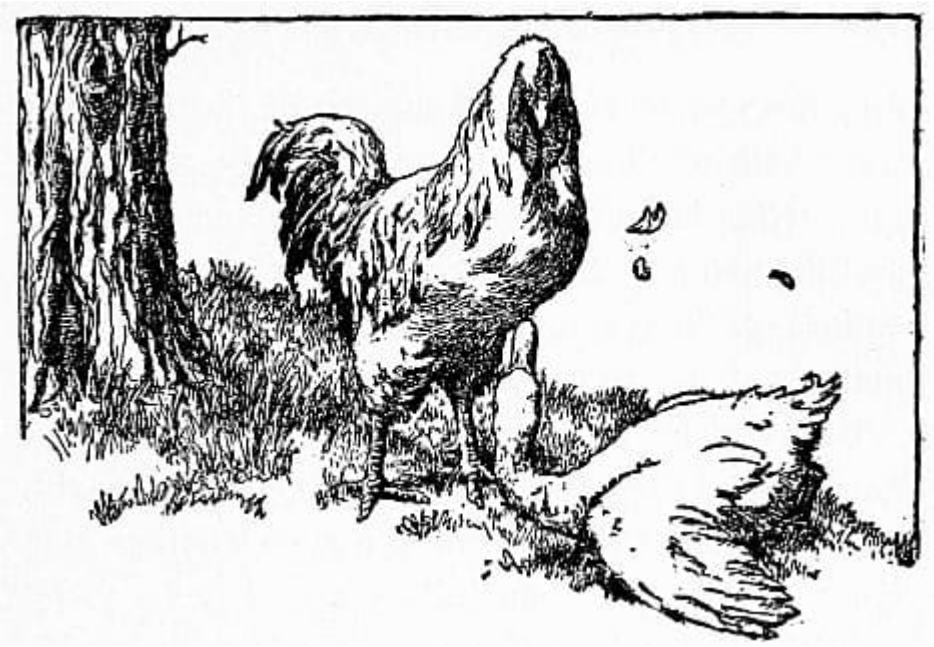
“Chicken-diddle told me.”

“How do you know that, Chicken-diddle?”

“I couldn’t help knowing, for I saw it with my eyes, and I heard it with my ears, and part of it fell on my tail. Oh, where shall we run? We ought to go some place.”

“Well,” said the Fox, “you come right in here, and I’ll take such good care of you that even if the sky falls down you won’t know anything about it.”

So in ran Turkey-lurkey, and Fox-lox put him in the big room, and shut the door. In ran Goose-loose, and he put him in the little room, and shut the door. In ran Duck-luck, and he put him in the cellar, and shut the door. In ran Hen-pen, and he put her in the attic, and shut the door. In ran Chicken-diddle, and Fox-lox kept him right there in the room with him. And what happened to them after that I don’t know, but nobody ever saw them again; if the sky really fell, I never heard about it. They were only a pack of silly fowls, anyway.



ある日、チキンディドルがバラのしげみの下でねむっていると、牛がさくの上から首をのばして、バラのしげみのてっぺんをかじりとりました。その音でチキンディドルは目をさましました。ちょうど目がさめたとき、バラの葉っぱが1まい、しっぽの上におちてきました。

「コケーッ！コケーッ！」とチキンディドルはさけびました。「空がおちてくる！」そして、足がうごくかぎり速く走っていきました。走って走って、なや前の庭まで来ると、ヘンペンが庭の土の上でガサゴソやっていました。

「ああ、ヘンペン、ガサゴソしてる場合じゃないよ。にげて、にげて！」とチキンディドルはさけびました。「空がおちてくるんだ。」

メンドリはガサゴソするのをやめました。「どうしてそれがわかるの、チキンディドル？」とヘンペンはたずねました。

「この目で見たし、この耳で聞いたし、そのかけらがしっぽにおちてきたんだもの。ああ、どこかに着くまで、にげよう、にげよう。」

「コッコッ！コッコッ！」とメンドリはさけんで走りだし、チキンディドルもそのあとを走っていきました。

走っていくと、アヒルの池に着きました。そこではダックラックが、ちょうど泳ごうと水に入るところでした。

「ああ、ダックラック！ダックラック！　泳いでる場合じゃないわ」とヘンペンはさけびました。「空がおちてくるのよ。」

「どうしてそれがわかるの、ヘンペン？」とダックラックはたずねました。

「チキンディドルが教えてくれたの。」

「どうしてそれがわかるの、チキンディドル？」

「わからないわけないよ。この目で見たし、この耳で聞いたし、そのかけらがしっぽにおちてきたんだもの。ああ、どこかに着くまで、にげよう、にげよう。」

「そうだね、にげたほうがいいね」とダックラックはガアガア言って、ヘンペンといっしょによちよち歩きだしました。そのあとをチキンディドルがついていきました。

走って走って、みどりの草原に着くと、グースルースがみどりの草を食べていました。

「ああ、グースルース、グースルース、食べてる場合じゃないよ。にげて、にげて」とダックラックはさけびました。

「どうしてにげなきゃいけないの？」とグースルースはたずねました。

「空がおちてくるからさ。」

「どうしてそれがわかるの、ダックラック？」

「ヘンペンが教えてくれたんだ。」

「どうしてそれがわかるの、ヘンペン？」

「チキンディドルが教えてくれたの。」

「どうしてそれがわかるの、チキンディドル？」

「だって、この目で見たし、この耳で聞いたし、そのかけらがしっぽにおちてきたんだもの。ああ、どこかへ、にげよう、にげよう。」

「そうね、にげたほうがいいわ」とグースルースはさけびました。

みんなはグースルースを先頭にして走りだしました。走って走って、シチメンチョウの庭に着くと、ターキーラーキーがいばって歩きながら、ゴロゴロないていました。

「ああ、ターキーラーキー！　いばって歩いてる場合じゃないわ！いばって歩いてる場合じゃないわ！」とグースルースはさけびました。

「どうしていばって歩いちゃいけないんだい？」とターキーラーキーはたずねました。

「空がおちてくるからよ。」

「どうしてそれがわかるんだい？」

「ダックラックが教えてくれたの！」

「どうしてわかるんだい、ダックラック？」

「ヘンペンが教えてくれたんだ！」

「どうしてわかるんだい、ヘンペン？」

「チキンディドルが教えてくれたの！」

「どうしてわかるんだい、チキンディドル？」

「わからないはずがないよ！この目で見たし、この耳で聞いたし、そのかけらがしっぽにおちてきたんだもの。ああ、どこかに着くまで、にげよう、にげよう。」

「そうだね、にげたほうがいいね」とターキーラーキーは言いました。そこでみんなは走りだしました。先頭はターキーラーキー、つぎにグースルース、つぎにダックラック、つぎにヘンペン、そしてチキンディドルです。

走って走って、フォックスロックスの家に着くと、フォックスロックスが戸口にねそべって、舌が口の中でくるりとまるまるほど大きなあくびをしていました。ターキーラーキーとグースルースとダックラックとヘンペンとチキンディドルを見ると、フォックスロックスはあくびをやめ、耳をぴんと立てました。みんなが来たのが、とてもうれしかったのです。

「おやおや」とフォックスロックスは言いました。「みんなそろって、どうしたんだい？」

「ああ、フォックスロックス、フォックスロックス、あくびしてる場合じゃないよ」とターキーラーキーはさけびました。「空がおちてくるんだ。」

「どうしてそれがわかるんだい、ターキーラーキー？」とキツネはたずねました。

「グースルースが教えてくれたんだ。」

「どうしてそれがわかるんだい、グースルース？」

「ダックラックが教えてくれたの。」

「どうしてそれがわかるんだい、ダックラック？」

「ヘンペンが教えてくれたんだ。」

「どうしてそれがわかるんだい、ヘンペン？」

「チキンディドルが教えてくれたの。」

「どうしてそれがわかるんだい、チキンディドル？」

「わからないはずがないよ。この目で見たし、この耳で聞いたし、そのかけらがしっぽにおちてきたんだもの。ああ、どこへにげたらいいの？どこかへ行かなくちゃ。」

「それなら」とキツネは言いました。「さあ、ここへお入り。たとえ空がおちてきても、何も気づかないくらい、しっかりめんどうを見てあげるよ。」

そこでターキーラーキーがかけこむと、フォックスロックスはターキーラーキーを大きなへやに入れて、戸をしめました。グースルースがかけこむと、小さなへやに入れて、戸をしめました。ダックラックがかけこむと、地下室に入れて、戸をしめました。ヘンペンがかけこむと、屋根うらべやに入れて、戸をしめました。チキンディドルがかけこむと、フォックスロックスは自分のいるへやに、そのままおいておきました。それからみんながどうなったのか、わたしは知りません。でも、だれもみんなのすがたを二度と見ませんでした。それに、空が本当におちてきたという話も、聞いたことがありません。どっちにしても、みんなおばかさんな鳥たちだったのです。

たんご と クイズ　チキンディドル（空がおちてくる！）

rose-bush バラのしげみ	**cow** 牛	**tail** しっぽ
sky 空	**hen** メンドリ	**duck-pond** アヒルの池
fox キツネ		

Q1 チキンディドルのしっぽにおちてきたのは、本当は何？

① 空のかけら　② バラの葉っぱ　③ 雨のしずく

Q2 アヒルの池で、泳ごうとしていたのはだれ？

① グースルース　② ターキーラーキー　③ ダックラック

Q3 さいごに、みんなが着いたのはだれの家？

① キツネのフォックスロックス　② 王さま　③ 牛

こたえ

Q1　②　牛がバラのしげみをかじったときに、バラの葉っぱが1まいしっぽにおちてきただけでした。空ではありません。

Q2　③　アヒルの池では、ダックラックがちょうど泳ごうとしていました。ヘンペンが「泳いでる場合じゃない」と止めました。

Q3　①　みんなはキツネのフォックスロックスの家に着きました。キツネはみんなを家に入れて、戸をしめてしまいました。

原田英語の多読ベストジュニア
本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。
haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #49001（Katharine Pyle、1918年）。パブリックドメイン。
挿絵：Katharine Pyle（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Jade Hjelstrom（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。